

## 学位論文の要約

題目 変わりゆく山村の民族誌 宮崎県椎葉村の生業変化、生存戦略、種間関係の動態  
申請者 合原 織部

本論の目的は、宮崎県椎葉村を事例に、近年の山村で生じている自然環境や生業活動をめぐり変容を考察することにある。当地域の自然環境や生業活動の変化は、戦後に国が山村を資源とみなして植林政策を行ったり、メスジカの保護政策などを導入したりした結果もたらされた。従って、国の関与によって引き起こされた山村の社会変容に付随して、それらの変化が生じている。本論では、国家による開発を経て、山村で生じている様々な自然環境や生業活動をめぐり変容を取り上げる。具体的には、約24ヶ月間のフィールド調査に基づき、当地域に顕著にみられる、野生動物（イノシシ、シカ、サル）による被害、ニホンミツバチの減少に伴う養蜂の変容、ジビエ事業を通じたシカ肉の商品化に焦点を当て、生業実践や被害対策のあり方を検討する。

序章では、これまでの日本の山村の生業変容を扱った先行研究をレビューし、本論の問いと視座を示す。それらの研究は、今日の山村状況を、過疎と獣害によって野生動物が人々の土地に侵入してきたことで、山村は衰退の一途をたどっていると論じてきた。本論では、そのような「滅びゆく山村」という捉え方を批判的に検討することを目的とする。野生動物／人間、野生の領域／人間の領域といった二元論では捉えきれないような、複雑な複数種間の交渉が生成している状況を考察することを目指す。

また、先行研究では、獣害、養蜂の変容、ジビエ事業といった問題は、生業ごとに個別に取り上げられてきた。本論ではそのような視座に代わって、山村で営まれる生業活動を総体として検討することで、山村の生業変容の全体を民族誌として描くことを試みる。

本論文は、序章と終章に加えて、9章から構成される。第1部の1章では、調査地の概要を示す。今日の変りゆく山村の状況を、社会構造、自然環境、生業活動の変容に着目して明らかにする。2章では、人々と土地との関係をより具体的に描きだすことを目的とする。山村という環境に本来は適さない稲作という活動に、当地域の人々が特別な意味を付与する点に焦点を当てる。限界集落における稲作実践に着目し、田の開拓から今日の獣害が常態化した状況までの歴史的な変遷を明らかにすることで、稲作の動態を考察する。

第2部では、獣害を通じた野生動物と人々との関係を取り上げる。3章では、イノシシとシカを対象とした有害鳥獣捕獲と、当地域で継承されてきた「伝統的」狩猟との関連を考察する。当地域では狩猟文化が継承されており、イノシシとシカが長く狩猟の対象となってきた。そのため、猟師たちは、それらの動物の生息数が増えたり行動範囲が広がったりした今日でも、積極的に有害鳥獣捕獲を行うことで被害を軽減させることに成功していた。そして、それらの実践は、当地域で継承されてきた狩猟の知識や技術、猟師がもつ山

の地形や動物に関する知識や観念などに基づいていることが明らかになった。とくに猟犬を重視する文化が根づいていることから、有害鳥獣捕獲の際にも猟犬が重要な役割を担っている。有害鳥獣捕獲では、猟期に行われる狩猟とは異なり、被害を及ぼす「害獣」の頭数を減らさなくてはならない。当地域でそれが獣害対策としてうまく機能しているのは、当地域の山を狩倉として狩猟を行ってきた猟師の経験に基づいているためであることを示した。

4章では、2000年頃から深刻化し始めた猿害に着目する。松尾地区の猿害対策におけるサルと農家や猟師との駆け引きに着目することで、従来の猿害研究の視座を再考する。それらの研究は、住人のサルに関する観念が、人々の被害対策のあり方を規定すると論じてきた。しかし、本論の事例からは、椎葉村で継承されてきた「サルの祟り」に基づく人々のサルに関する観念が、実際の猿害対策においてどのようにサルと関わるのかという点によって、解釈のあり方が異なるものになることを示した。5章では、猿害対策に用いられる大型囲いワナの開発と利用を検討する。霊長類の研究所において効率性を追求して開発された大型囲いワナが、椎葉村という特定の社会文化的な文脈に取り込まれた際にはどのように機能するのかを考察する。

第3部では、「家畜・半家畜」に分類される生物と人々との交渉に着目する。6章では、猟犬を取り上げる。従来の民俗学研究は、九州山間部を事例に、狩猟時に猟師が猟犬をいかに用いるのかという点に焦点を当ててきた。一方で、本論は、コンタクト・ゾーンという概念に依拠して、猟師と猟犬の交渉を、日常と狩猟との異なる位相に着目して考察する。そのことによって、猟犬の主体性が異なって立ち現れるさまを描き出す。

7章ではニホンミツバチの養蜂に焦点を当て、その活動が、ミツバチ、養蜂家、蜜源植物、天敵、寄生虫などの複数種間の交渉によって方向づけられる過程を検討する。そのことを通じて、従来のニホンミツバチの養蜂を扱った先行研究が、養蜂を「半家畜」としてカテゴリー化してきた視座を再検討することを目指す。8章では、近年当地域で問題となっているミツバチの減少に着目して、養蜂活動の変容を明らかにする。それを引き起こしている主な原因として、蜜源植物の減少、ハチミツの商業化、天敵であるスズメバチやアカリダニの増加、ミツバチの疾病やウイルスの増加といった現象を取り上げる。

第4部9章では、ジビエ事業の導入と人々と野生動物の関係性の変化に焦点を当てる。なかでも、近年、宮崎県で進められているジビエ事業を通じたシカ肉の商品化を取り上げる。西米良村、諸塚村、美郷町、日之影町、えびの市、延岡市では、2014年頃より食肉処理施設を建設し、シカ肉を食用肉として流通してきた。同じく、椎葉村でもシカ肉の販売を試みてきたが、2022年現在においても食肉処理施設が建設されず、旅館Tが個人でシカ肉を利用してイヌ用のペットフードを製造しているのみであることが明らかになった。本章では、ジビエ事業に取り組む地域におけるシカ肉の生産過程と、椎葉村におけるペットフードの製造過程とを比較検討する。シカ肉の生産過程を、地域で継承されてきたシカと人々との関係性から考察すると、「シカ肉」に異なる意味づけがなされており、そのこと

がシカ肉の商品化の成功／不成功につながることを示す。

終章の10章では、序章で取り上げた山村の変容を論じてきた先行研究の視座を再検討する。先行研究が、今日の山村を荒廃した土地として論じてきたのに対して、そのような環境変化が著しい土地においても、現場では生業活動や被害対策を通じて、様々な種間の交渉が生じており、それらが生業活動、被害対策、特産物の商品化といった活動を方向づけている様子を描きだす。また、そのような環境において、人々はいかに生業や対策を営んでいるのかを考察する。今日の山村の人々の実践は、人々がこれまでに山村という環境との相互作用のなかで蓄積してきた自然環境や野生動物などに関する知、認識、観念、実践などに基づいていることを指摘する。

以上の考察からは、今日の山村の状況は、先行研究が論じてきたような、野生の領域（山）／人間の領域（里）、野生動物／人間などの二分法では説明することができないことが明らかになる。今日の山村は、先行研究が論じてきたような“侵略（encroachment）”という概念では捉えきれない、複雑な種間の交渉や、人々の生存戦略、空間の構造によって成り立っていることを示す。